『チャイナ・ウィークリー・レビュー』は、一九三八年三月何日号なのか、出典が明記されていない。

確かに、南京占領に先立つ昭和十二年（一九三七年）十一月十九日、蘇州が陥落した。すでに第一章で述べたように、支那の古来からの「堅壁清野作戦」が市民の脱出を常に生み出していたから、蘇州でも日本軍の来る前に市民はほとんど逃げていた。汪兆銘がシナ軍撤退時は大小の区別なくすべての都市を焼き尽くし、一人残らず支那人同胞を殺し尽くして、日本軍の前には何も残さぬと宣言していたからである。そしてそれが蔣介石に支持されていたからである。

それにしても蘇州の人口激減は、あまりにも著しかった。

そこで支那に関して最も権威ある『チャイナ・イヤーブック』の一九三八年版は、日中戦争の「事件の要約」において、「十一月二十日、日本軍蘇州占領。二〇万の人口のうち市に残るもの僅かに五〇〇」Japanese capture Soochow. Only 500 out of population of 200,000 remain in city. と記録したのであった。

日付からも分かるように、これは日本軍が蘇州を占領したとき、わずかに五〇〇人が蘇州に残留していたことを示す。日本軍が入城して虐殺を開始したから、人口が五〇〇に激減したというわけではなかった。